

不安の中の若者と仕事

久木元真吾

(公益財団法人家計経済研究所次席研究員)

本稿は、25歳から39歳の広い意味での「若者」たちに実施した調査結果、特に自由記述の回答をもとに、若者たちの将来への不安について、その内容と背景を、仕事や働くこととのかかわりを重視しつつ描き出すことを試みる。まず、「将来に対して不安を感じる事が多く」かつ「自分の将来の見通しは暗いと思う」若者が、全体の過半数を占めるほど多く存在していることが確認された。次に、自由記述の分析から、「現状にとどまることの不安」と特徴づけられる不安が若者たちの中にみられることを指摘し、そのことの背景の一つとして、若者たちの用いる語彙において、現状を「打開」し、今は異なる新しいステージに移ることを志向する言葉が多く用いられていることを示した。しかし、そのような「打開」への志向は、同時に「現状を出ていくことの不安」を喚起するものでもあり、その結果として、二つの不安を同時に抱えた状態が長期間化しかねなくなっており、その過程をいかに有意義な時間にしていくかが課題になりつつあると考えられる。またその中で、少数ではあるものの、働くこと自体を忌避する志向が若者たちの中にみられることも注目される。以上から、若者たちの不安が、時間の経過によって自然に解消されるものではなく、長く持続するものになりつつあることが示唆される。若者に対する社会的な支援策を構想するにあたって、こうした不安のあり方を考慮することが求められる。

目次

- I はじめに
- II 不安の広がり
- III 将来についての若者の言葉
- IV 現状にとどまることの不安
- V 現状の「打開」と不連続なステージへの移行
- VI 現状から出ていくことの不安
- VII 働くことからの離脱へ?
- VIII おわりに——不安の中の若者たち

I はじめに

「老後に向けて貯蓄もしたいが、それ以前に今現在の生活に備えた貯蓄をする余裕すらないので、このままの状態が続けていいのか不安である」(31歳男性、正社員、「不安・暗い」型)¹⁾。

「やりたい仕事が無くて将来は不安でいっぱいですが、アルバイトで何かを見つけられるよう頑張りたいです」(25歳男性、契約・パート・派遣、「不安・暗い」型)。

「結婚して子どももほしいが、実際結婚しないかもしれない。自分一人で生きていく、若しくは家族を持つにしても、お金はあるにこしたことはない、稼ぐ力が必要だと思う。今の仕事は儲からないので、投資等の副業で稼げるような知識が欲しい。……本職については明るい未来はみえないので、適当にこなしているというかんじ。どうやって生きていけばいいのか？よくわからなくて不安になることはあるが、あまり考えないようにしている」(30歳女性、正社員、「不安・明るい」型)。

「イラストレーターにはなったが仕事がない。オ

能もない気がして、これで仕事になるのかと不安だ。以前の仕事で壊れた体が治らない。病氣ばかり見つかって、辛い」(27歳女性、契約・パート・派遣、「不安・暗い」型)。

若者が自らの将来について不安を感じる——そう聞いたとき、どう感じるだろうか。少なくとも人たちは、そのことはごく普通の、ありふれたことだと感じるのではないだろうか。というのも、若者がさまざまな成長を経験する過程で、自らの将来を不安に思うことは、誰もが通過する発達段階上のステップだという見方もしばしばなされるからだ。仮にそうした不安が一つのステップであるならば、時間の経過や若者の成長に伴い、やがてその不安は自然に解消されるという前提がどこかに置かれている可能性がある。しかし、本当に不安は自然に解消されるのだろうか。

「若者」というものが、就職・結婚など、社会的な立場のさまざまな面において、未決定の状態から決定された状態へ移行していく存在のことだと考えるならば、若者がそうした移行を前にして自分の将来について不安を感じることは理解できることであろう。また、そのような枠組みでとらえるならば、移行を終えた段階で、将来についての不安も解消されると考えられるかもしれない。

しかし、「未決定の状態から決定された状態へ移行していく存在」という若者像は、現時点ではあまりに古典的なものだといわざるをえない。久木元(2009)では、若者の大人への移行が論じられる際に、従来は①その移行が一方的で不可逆的な性格をもち、かつ②関連する様々な面での移行のタイミングが近接し、さらに③誰もがその移行を経験するという前提に基づいて論じられてきたとして、そのような前提に基づく移行モデルを「古典的な移行モデル」と呼んだ。現在の日本社会では、こうした移行モデルは必ずしも一般的なものではなくなりつつあり、誰もがスムーズに移行ができるとは限らなくなった結果、未決定な状態を生きる期間が長くなっているのが実状である。そうした中では、若者たち(しかも、従来の「若者」のイメージよりも高い年齢の人たちまで含めて)にとり、自らの将来に不安を抱くことは自然なことといえるかもしれない。そして、移行が

容易に完了しにくい状況下では、その不安が解消されることもまた、自明視できなくなっているのではないだろうか。

だとすれば、現在の日本社会において、若者たちが抱いている将来への不安は、いったいどのようなものなのだろうか。本稿は、広い意味の「若者」たちへの調査結果、特に彼ら/彼女らの自由記述の回答を主な素材として、若者たちの不安の内容と背景を、仕事とのかかわりを重視しつつ描き出すことを試みる。そのことを通じて、若者たちが置かれた状況とそこから見える世界像に少しでも迫ることをめざす。

II 不安の広がり

まず、若者たちの間で、将来に対する不安がどのくらい広がりをもっているのかを、データから確認することにしよう。

ここで用いるのは、2009年3月に筆者が実施した、東京・神奈川・埼玉・千葉の各都県に在住する、25歳から39歳の未婚男女2471名(男性1235名、女性1236名)を対象とするインターネット調査の結果である²⁾。この調査(以下、『2009年調査』とよぶ)では、基本属性、履歴、仕事・結婚・生活に関する意識・相談ネットワークなど、若者の生活実態と意識のさまざまな面についてたずねている。以下、本稿において分析の対象となるのは、すべてこの『2009年調査』のデータである。

対象者の年齢の上限を39歳にしている点は、「若者」の年齢層の設定としては必ずしも一般的ではないかもしれない。しかし、『国勢調査』(2005年)によると、東京都では35~39歳の男性・女性の未婚率は、それぞれ33.8%・26.2%を占めており³⁾、際立って大きな割合とまではいえないものの、無視できない程度に存在しているのも事実である。もちろん、未婚という点だけで若者を定義することはできないが、この割合が今後急速に減少していくとは考えにくく、ここで39歳の未婚男女を広く「若者」とみなして検討の対象とすることには、一定の意味があると考えられる。

また、年齢の下限は25歳としたが、これによ

りここでの対象者の「若者」の多くは、既に学校を終えている人たちとなっている。回答者全体に占める学生の割合は2.3%にとどまっており、現役の学生は少数しかいないという点も留意されたい。

さて、この調査の中には、ストレートに不安についてたずねた質問項目がある。いくつかの文を挙げて、それぞれについて自分の考え方や生き方にあてはまるかどうかを、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の中から選んでもらうという形の質問であるが、その一つに、「将来に対して不安を感じる人が多い」という文がある。これについて、「よくあてはまる」「ややあてはまる」を選んだ人の合計割合をみると、実に82.9%に達していた。今回の調査対象者の若者たちのうち、8割以上が将来への不安を感じる人が多いというのである。

また、同様の形式で、自らの将来展望についてたずねた質問もある。それは、「自分の将来の見通しは明るいと思う」というもので、これに「よくあてはまる」「ややあてはまる」を選んだ人の合計割合は38.2%であった。つまり、それ以外の61.8%は、将来の見通しはいわば「暗い」と思っていることになる。このように、ここでの若者たちには、自らの将来に対して、不安と否定的な展望をもつ人がかくも多くなっているのである。このことは、議論の出発点として確認しておきたい。

さて、「将来に対して不安を感じる人が多い」と「自分の将来の見通しは明るいと思う」の二つに対する回答状況を組み合わせることによって、将来意識に関する4つの類型を抽出することができる。すなわち、「不安・明るい」型、「不安・暗い」型、「非不安・明るい」型、「非不安・暗い」型である(表1)。

このうち、最も注目されるのは、上で挙げた「不安・暗い」型である。これは、将来に対する不安を感じる人が多く、かつ自分の将来の見通しも明るくないと回答した人たちで、このタイプは56.9%に及び、全体の過半数を占めている。25歳から39歳の「若者」たちの実に6割近くは、将来への不安を抱え、その見通しも否定的なので

表1 将来に関する意識の分布

(単位: %)

	明るい	暗い	計
不安	26.0	56.9	82.9
非不安	12.1	4.9	17.1
計	38.2	61.8	100.0

注: 1) [2009年調査] (東京および近県在住の25~39歳の未婚男女) による。以下の表も、すべて同調査による。

- 2) 表中の数値は、全体を1とした場合の割合(%)。全体の人数は2471人。端数は四捨五入しているため、個々の値の合計と合計欄の値が必ずしも一致しない。
- 3) 「不安」は、「将来に対して不安を感じる人が多い」に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答した人の割合。「非不安」は、「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」と回答した人の割合。
- 4) 「明るい」は、「自分の将来の見通しは明るいと思う」に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答した人の割合。「暗い」は、「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」と回答した人の割合。

ある。

次に多いのが、「不安・明るい」型である。これは、将来に対する不安を感じる人が多いが、自分の将来の見通しは明るいと考えるタイプであり、全体の26.0%を占めている。

「非不安・明るい」型は、「不安・暗い」型とは正反対に、二つの質問にポジティブな内容を回答した人たち、つまり将来に対する不安を感じることは多くなく、明るい将来見通しを持っていると回答した人たちである。このタイプは、全体の12.1%を占めている。

最後に、「非不安・暗い」型は、将来に対する不安を感じることは多くないが、将来の見通しは明るいわけではないという人たちである。最も少なく、全体の4.9%である。

ちなみに、詳細は省略するが、4類型の分布を男女別にみると、「不安・明るい」型は女性で、「非不安・暗い」型は男性でややその割合が多くなっているものの、10%水準での有意差にとどまっており、男女間で4類型の分布傾向が著しく異なっているわけではない。「不安・暗い」型と「非不安・明るい」型の割合は男女間で近い値となっており、将来への不安や見通しに関する以上のような意識の特徴は、男女を問わずある程度共有されているといえる。

ただし、ほかの基本属性は4類型の分布に影響を及ぼしている。まず年齢に関しては、大まかな

傾向として、男女とも年齢が上がるにつれて「不安・暗い」型の割合が大きくなり、「不安・明るい」型および「非不安・明るい」型の割合が少なくなる（表2）。加齢に伴い落ち着いていくのではなく、将来不安や見通しの暗さはむしろ高まっているようであり、時間の経過だけで不安が解消されていくわけではないことがわかる。また、仕事の状況については、男女とも契約社員・派遣社員・パートおよび無職で「不安・暗い」型の割合が大きく、「非不安・明るい」型は男性では正社員、女性では正社員および自営・家族従業者で相対的に多くなっている（表3）。年取については紙幅の都合もあり詳細は略すが、大まかな傾向として、男女とも年取が多いほど「不安・明るい」型および「非不安・明るい」型の割合が大きくなり、「不

安・暗い」型の割合が小さくなる。

以上にみるように、将来への不安感・将来の見通しの両方でポジティブな回答をしている「非不安・明るい」型は1割強にとどまり、両方でネガティブな回答をしている「不安・暗い」型は過半数に達する。その背景には、年齢・仕事の状況・年取などの影響がうかがえる。こうした不安感の広がりには、山田（2004：192）などでもその可能性が指摘されていたが、実際の調査結果からもそのことを確認することができたといえる⁴⁾。

Ⅲ 将来についての若者の言葉

「若者」たちの将来に関する意識、特に「不安」について、より具体的にその実状が把握できる

表2 将来に関する意識の分布（男女・年齢別）

（単位：％，人）

	年齢（歳）	「不安・明るい」型	「不安・暗い」型	「非不安・明るい」型	「非不安・暗い」型	計	n
男性	25～29歳	27.7	51.5	15.3	5.6	100.0	412
	30～34歳	24.4	60.2	11.0	4.4	100.0	410
	35～39歳	21.3	61.3	9.9	7.5	100.0	413
女性	25～29歳	32.4	49.6	13.6	4.4	100.0	411
	30～34歳	27.6	55.0	14.0	3.4	100.0	413
	35～39歳	22.8	63.8	9.0	4.4	100.0	412

注：男性： $\chi^2=16.581$, $p=.011$, $df=6$

女性： $\chi^2=20.324$, $p=.002$, $df=6$

表3 将来に関する意識の分布（男女・仕事の状況別）

（単位：％，人）

	仕事の状況	「不安・明るい」型	「不安・暗い」型	「非不安・明るい」型	「非不安・暗い」型	計	n
男性	正社員	28.1	53.0	13.2	5.6	100.0	771
	契約・派遣・パート	14.4	73.8	6.2	5.6	100.0	195
	自営・家族	23.4	58.4	10.9	7.3	100.0	137
	無職	12.5	71.6	9.1	6.8	100.0	88
女性	正社員	31.3	50.0	14.5	4.2	100.0	552
	契約・派遣・パート	24.5	60.2	10.2	5.0	100.0	440
	自営・家族	32.1	51.9	14.8	1.2	100.0	81
	無職	18.8	74.2	4.7	2.3	100.0	128

注：1) 「正社員」は「民間企業の正社員」「公務員等の正職員」の合計、「契約・派遣・パート」は「契約社員・嘱託」「派遣社員」「パート・アルバイト」の合計、「自営・家族」は「自営業・自由業」「家族従業者」の合計。

2) 仕事の状況が「その他」（男性12人、女性9人）および「学生」（男性32人、女性26人）の者は除いている。

データはないだろうか。以下の議論では、『2009年調査』の最後に置いた、「ご自身の将来について、お考えになっていることを、ご自由にご記入ください」という自由記述の質問項目をとりあげ、検討を加えたい。実際には、この質問項目は次のような形で例示を加えてたずねている。

ご自身の将来について、お考えになっていることを、ご自由にご記入ください。

(例：1年後に今のアルバイト先で正社員になる)

(例：30代のうちに結婚して出産したい)

(例：「やりたいこと」が見つかったが、挑戦すべきかどうか悩んでいる)

(例：将来のことは気になるけど、今どうしたらいいのかよくわからない)

こうした例示に反応して、回答の内容が影響を受けている可能性があるのは否定できない⁵⁾。しかし、その点を考慮したとしても、調査の中で回答者の若者たちが自らの将来について自由に記述できるのはここだけであり、将来への不安について考える上で、この質問への回答を検討することは必須であると考えられる。

以下では、この質問に対する回答の自由記述のテキストデータを素材に、若者たちの将来に関する意識の実状を探る。本節ではまず、以上のような例を含む自由記述のデータについて、ごく簡単

にはあるが、計量的な面から検討を加える。具体的には、このテキストデータにおける、単語ごとの出現ケース数および全体に対するその割合を、男女別および前節で論じた将来意識に関する4類型別に調べてみた(表4, 表5)。つまり、ある単語がどのくらいの割合で自由記述の中で用いられているか(自らの将来を語る際に、よく用いられている単語は何か)が、これらの表で示されている。

紙幅の都合もあり、限られた結果しか示すことができないが、特にここでは、将来の具体的な方向性や、将来に関する意識に関わる単語に注目する。まず男性についてみよう(表4)。「結婚」への言及はどの類型でも多いが、将来展望が「明るい」2つの類型で特に割合が大きくなっており、いずれも2位の「仕事」を大きく引き離して最も多く用いられる語となっている。将来展望が「暗い」2つの類型では、「結婚」の頻度は少なくはないものの突出して多いということはない。また、「不安・明るい」型では、他の3類型では5%未満にすぎない「独立」が6.0%とやや高くなっている。「不安・暗い」型では、「転職」や「正社員」が他よりもやや多い。「正社員」が多いことは、この類型で現在の仕事の状況が非典型雇用の人が相対的に多かったことと呼応している。また

表4 自分の将来に関する自由記述で用いられている単語(男性)

「不安・明るい」型 (単位：%)			「不安・暗い」型 (単位：%)			「非不安・明るい」型 (単位：%)			「非不安・暗い」型 (単位：%)		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合	語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
結婚	69	22.8	仕事	119	16.7	結婚	37	24.8	ない	20	27.8
仕事	47	15.6	結婚	115	16.2	仕事	19	12.8	結婚	8	11.1
今	40	13.2	今	104	14.6	ない	18	12.1	仕事	6	8.3
ない	34	11.3	将来	99	13.9	自分	15	10.1	今	5	6.9
将来	23	7.6	転職	66	9.3	今	12	8.1	転職	5	6.9
転職	21	7.0	ない	57	8.0	転職	11	7.4	会社	4	5.6
自分	19	6.3	不安	56	7.9	会社	11	7.4			
独立	18	6.0	自分	55	7.7	将来	10	6.7			
資格	16	5.3	正社員	42	5.9	資格	8	5.4			
			いい	38	5.3						

注：1) 「ケース数」は、自由記述の内容にその語が含まれていたケースの数。

2) それぞれの類型の全ケース数は、「不安・明るい」型は302、「不安・暗い」型は712、「非不安・明るい」型は149、「非不安・暗い」型は72。

3) 「割合」は、各タイプの全ケース数に対する、その語が含まれていたケースの割合。

4) 「割合」が5%以上のもののみを掲載している。

表5 自分の将来に関する自由記述で用いられている単語（女性）

「不安・明るい」型 (単位：%)			「不安・暗い」型 (単位：%)			「非不安・明るい」型 (単位：%)			「非不安・暗い」型 (単位：%)		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合	語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
結婚	159	46.6	結婚	226	32.6	結婚	68	45.0	結婚	14	28.0
仕事	98	28.7	仕事	174	25.1	仕事	45	29.8	仕事	11	22.0
今	60	17.6	今	107	15.4	出産	27	17.9	今	10	20.0
出産	46	13.5	ない	96	13.8	今	23	15.2	ない	7	14.0
子供	46	13.5	将来	93	13.4	子供	18	11.9	転職	3	6.0
自分	29	8.5	自分	90	13.0	転職	10	6.6	出産	3	6.0
ない	25	7.3	不安	82	11.8	生活	9	6.0			
正社員	24	7.0	転職	73	10.5						
転職	23	6.7	正社員	61	8.8						
資格	21	6.2	出産	54	7.8						
将来	20	5.9	子供	51	7.3						
生活	18	5.3	資格	46	6.6						
			生活	45	6.5						
			いい	42	6.1						
			何	42	6.1						

注：1) それぞれの類型の全ケース数は、「不安・明るい」型は341、「不安・暗い」型は694、「非不安・明るい」型は151、「非不安・暗い」型は50。
2) 「ケース数」や「割合」の定義などは表4と同じ。

「不安」という語にストレートに言及するケースも、この類型では7.9%と他にはみられない高い割合となっている。全体として、男性の場合、「結婚」「転職」「資格」「独立」「正社員」「不安」などの語が多く用いられていることがわかる。

続けて、女性についてみてみよう（表5）。女性の場合、「結婚」への言及が非常に多く、4類型のどれにおいても最も出現頻度が多くなっている。特に、将来展望が「明るい」2つの類型でその割合が大きい点は、男性の場合と同じだが、割合の値は5割に迫るほどであり、未婚の女性にとって将来を考える際に、結婚は言及されやすい語であることが確認できる。「結婚」に次いで多い「仕事」も、男性に比べてその割合は軒並み高くなっている。

将来展望が「明るい」2つの型で「結婚」を選ぶ割合が大きいのは男性の場合と同様だが、「出産」と「子供」も、将来展望が「明るい」2つの類型でその割合が大きくなっている。人数が最大の「不安・暗い」型では、「転職」「不安」などが他の類型よりも大きい割合となっている。男性の「不安・明るい」型にみられた「独立」の割合の

多さは、女性ではみることはできず、「独立」は女性ではどの類型でも5%未満であった。「正社員」は男性では「不安・暗い」型でだけ5%を上回っていたが、女性では、男性に比べて非典型雇用の人が多いこともあり、「不安・明るい」型と「不安・暗い」型の2つの類型で多くなっている。そして、「不安」という言葉が直接言及される割合が高いのは「不安・暗い」型であり、その割合も11.8%と小さくない値である。全体として、女性の場合、「結婚」「転職」「資格」「正社員」「不安」などの語は男性同様多く用いられているが、さらに「出産」「子供」が加わっている。

IV 現状にとどまることの不安

前節で、将来についての自由記述の質問項目への回答における、全体的な単語使用の状況を概観した。ここでは本稿の関心に即して、「不安」という言葉にクローズアップし、単語レベルではなく「不安」に言及する自由記述のより具体的な内容を検討する。なお以下の考察は、厳密な検証を経たものというよりも、むしろ探索的に、仮説的

なロジックの析出を試みる議論にならざるをえない。より実証的なアプローチでの考察は、今後の課題としたい。

まず、この自由記述の回答において、「不安」という言葉を回答の中で直接用いているのは、男性で1235ケース中69ケース(5.6%)、女性で1236ケース中99ケース(8.0%)であった。そのうち、男性で56ケース、女性で82ケースは、「不安・暗い」型であった。つまり、男女とも、「不安」という言葉を用いているケースの8割以上は、「不安・暗い」型に集中している。さらに「不安・明るい」型も含めれば、男女とも数ケースを除く大半のケースが「不安」の2つの型に分類される人に語られている。不安という言葉を用いて語っているのは、やはり不安を感じている若者なのだといえる。

では、そこで語られる不安は、具体的にどのようなものだろうか。以下、直接「不安」という言葉を用いている自由記述を中心に引用しつつ(それは自動的に、主に「不安・暗い」型の人の言葉を引用することになる)、概観することにした。

まず、漠然と将来への不安を述べる例は多々みられる。そもそも「将来」という言葉自体が多分に抽象的なものである以上、漠然とせざるをえない面があるのは確かだが、それ以上に見通しの不透明感ゆえに不安もまた漠然としたものになっているといえる。

「今は、ただ将来のことが心配なので、一生懸命、仕事をがんばっています」(35歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「今は日々の暮らしで精一杯なので先行き不安」(33歳男性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「ひと月先の見通しも明るいのか暗いのかわからないような不安でいっぱい」(34歳男性、無職、「不安・暗い」型)。

「自分の将来の見通しも暗い気がするし、税金や保険を払っていても国の将来も暗い気がしてなんだかむなし」(31歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

「頑張れば、いつかは楽になれるのか不安」(36

歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

ただ、不安の所在をより具体的に語るものも多い。中でも顕著なのが、仕事に関わる不安である。仕事の収入に関するもの、仕事の内容(今後のキャリア)に関するものが主である。現在の収入(の低さ・伸びなさ)では、将来的に十分安心できる水準に達しないと予想されることへの不安、キャリアアップ(転職やパートの正社員化)をめざしたいが実現が容易でないことへの不安などが語られている。

「このまま今の仕事を続けていいのか……。収入面で不安。」(29歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。「業界的に年を取るほど不利な環境になると思うので不安」(38歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「今の年齢を考えると将来、正社員になれるのか不安である」(35歳男性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「もう少しで40代なので就職できるかどうかすごく不安です」(36歳男性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「現在の仕事がこのままいつまで継続できるかが不安」(37歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

「いつまでもアルバイトでは不安だが、学歴も低い資格も何も無いので正社員に転職できるかわからない」(27歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

また、社会全体の経済状況が好転しない中、現在の勤務先の将来に不安を感じる例もみられる。他方で、将来の心配がない勤務先が他に見つかるのかというと、それにも懐疑的にならざるをえないこともあるようである。

「所属している会社がどうなるかが不安である。もう少し安定したところに転職したい」(33歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「会社の将来は不安だが、転職先も保障されていないだろうと思う」(28歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

仕事をめぐる将来の不安は、経済的な不安を媒介に、ライフコースをめぐる不安にもつながっている。特に女性の場合、結婚・出産は大きな関心の対象となっている。結婚しない・出産しない人

生を送ることになりうることや、実際にそうなった場合の将来について、不安が表明されることになる。また自らの老後も、将来の不安の背景をなしている。

「このまま結婚もせず、派遣社員で働いていて、自分の将来がどうなるかとても不安」(35歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「将来のことが不安でしかたない。特に収入面で。なので結婚や出産のことが考えられない」(30歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

「結婚できるのか不安である。だからといって、新たな出会いがなかなかない」(28歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

「目指していた仕事に転職することはできたが、結婚や出産のことを考えると将来が不安。転職を優先して結婚のタイミングを逸したことを後悔し続けている。本当にこれでよかったのか、自信が持てない」(31歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

「自分の老後がとても不安です。このまま家賃を払い続けることはできないだろうし……」(37歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

また、自分自身の健康状態が将来への不安の源泉となるケースもみられる。また、そこにさらに自らの親の介護の責任も関係してくる例もある。

「例にもありますが、将来の事は気になるし情けないですが、どうしたらいいのかわかりません。年金だの医療だの親の介護だのと不安ばかりです」(37歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「あまりに多忙で体調を崩し、このまま仕事を続けることに対し将来的に健康面で不安がある」(37歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「持病があるのでフルタイム勤務は今後もできそうにないが、結婚する予定やあてなどもない。兄弟もなく一人っ子なので、自分の将来の生活等を考えると不安で仕方がない。貯蓄をしたいと思うが、毎月の病院代や国民年金保険料が高くてなかなか貯蓄に回せない」(31歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「健康的な問題でいつまで働けるか不安だ。親に医療費を援助してもらっているので1人になったとき、生死がどうなるか不安だ」(39歳女性、派

遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「ブランクが空いてしまったのが、就職難に追い打ちをかけてしまい、後悔と不安で毎日悩んでいる。やりたい事がよく分からない。会社員が向いていないのではと感じ始めている」(28歳女性、無職、「不安・暗い」型)。

「母親の介護に専念しているので働けず貯金がないし年金も納めていない。欲しいものが買えずストレスが溜まる。父親の会社の景気がいつ回復するか分からないので今年もボーナスが出なかったらマンションのローンが返済できない。将来が不安でしかたがない」(31歳女性、無職、「不安・暗い」型)。

以上でみてきた、具体的な不安の所在を語る自由記述の数々の例は、次の点において共通の不安を語っているといえる。すなわち、これらの語りが見しているのは、「現状のままでは将来が不安である」ということである。現在の仕事の状況や生活の状況は、今まさに危機的な状況に直面しているわけでは必ずしもないものの、このままその状況がただ続いていくことが、キャリアの発展や生活上の安定につながらず、結果的に不安定で困難な状況をもたらしてしまうのではないか。あるいは、現在の状況がこのまま無条件に長く続いていくとは考えにくく、どこかの時点で状況が変わってしまう可能性は高く、そのときには確実に不安定さや困難に直面せざるを得ないのではないか。以上のさまざまな語りにもみられたのは、このような形の将来への不安であったといえる。

このような不安は、「現状にとどまることの不安」とまとめることができるだろう。現在の状況が望ましい将来につながっているという感覚が得られないために、不安が抱かれているのである。『2009年調査』の回答者の自由記述から浮かび上がってくるのは、「とどまること

V 現状の「打開」と不連続なステージへの移行

「現状にとどまること

のか。一つは、現状にとどまり続けながら、その中で少しでも事態が良い方向に変化することを待つという手がある。

仮にある会社に正社員として就職し、定年までその会社に勤続するという将来イメージが抱かれているのであれば、「昇進」のような、その組織内で地位や賃金が上昇していくことを表す言葉が、将来を語る上で用いられると予想される。しかし実際に『2009年調査』において、「昇進」という言葉が、同じ自由記述のデータにおいてどのくらい見られるかを調べてみると、全体でわずか3ケースにとどまっている（いずれも男性の正社員、うち2名は「不安・明るい」型、1名は「非不安・明るい型」）。将来について語る中で「転職」や「資格」という言葉は頻出しているが、「昇進」はほとんど言及されていないのである⁶⁾。また、「定年まで今の会社で仕事をしたい」（34歳男性、正社員、「不安・明るい」型）というように、定年まで過ごそうと現時点で思えるほどの今の仕事環境のよさをうかがわせる例もあるが、そこまで述べるものもやはり少数である（3ケース、いずれも男性の正社員、うち2名は「不安・明るい」型、1名は「非不安・暗い」型）。現在の状況に基本的にとどまった上で、その中で少しでも望ましい方向へ前進をはかろうとする語りは、ごく少数にすぎないというのが実情である⁷⁾。

自由記述の全体をみる限り、不安の表明の有無によらず、また必ずしも「不安・暗い」型の若者に限らず、若者たちが自らの将来について語る際に用いる語彙は、「現状にとどまる」というよりも、「現状とは異なる場所に向けて歩み出ていく」という選択を志向するものが多い。「結婚」「転職」「資格」「正社員」「出産」「子供」「独立」——Ⅲの分析で上位にみられたこうした語を改めてみると、いずれも現状にとどまるのではなく、そこから歩み出して新しい場所に出ていくこと、現状とは異なる新しいステージに移行することを含意する言葉であるといえるだろう。「結婚」「出産」「転職」「独立」などは、まさに今の自分とは異なる状況に将来移っていくことを示す言葉であり、「正社員」も、現在そうでない立場の者にとっては新しいステージへの移行そのものであろう。

「資格」も、新しいステージに移行するためのアイテムとみなされているのかもしれない。

注意すべきなのは、次の点である。すなわち、「現状とは異なる新しいステージ」である以上、それは現状とは不連続なものであることを含意する。つまり、そうした新しいステージは、今の自分と地続きに存在しているのではなく、自分自身の大きな変化を伴ってはじめて到達するものである。逆に言えば、現在の環境にとどまり、そこで努力を重ねていき、そのことによって自然に事態が進んでいくとは見なされない。そうではなく、いわば現状とは異なる世界に跳躍していくこと、世界を一変させることが意味されているのではないだろうか。

以上から浮かび上がるのは、多くの若者たちにとって、自らの将来は現在の状況をそのまま延長しても望ましい状態にたどりつくわけではないとみなされており、自らの状況に何らかの変化を起こすこと、現状とは不連続な新しいステージにジャンプして移ることこそが可能性を開きうると考えられているという状況である。かつて山田(1996)は、男性にとって結婚は「イベント」であるが、女性にとっては「生まれ変わり」であると論じた。つまり、女性にとっての結婚は、状況の大きな変化を伴うことがありうるという意味で「生まれ変わり」にも近いものであるが、男性にとっての結婚は、一つの「イベント」であるにすぎず、そこまで著しい状況の変化にはつながりにくい、というわけである。これにならえば、現時点においては、結婚に限らず、そして女性に限らず、多くの若者たちが将来について語る時、「生まれ変わり」の機会をいかに得るかという形で語られる傾向があるといえるだろう。リセットして仕切りなおすのであれ、ジャンプして高いステージに移るのであれ、現在の状況を何らかの方法で「打開」して、現状とは不連続な新しいステージに移行すること——そういう形で、不安からの離脱と将来への移行は語られているのである。若者の将来への不安は、自然に解消されるものとはイメージされなくなりつつあるのではないだろうか。不安が解消された状態は、何らかの「打開」を経なければたどりつけないほど、現状

から切り離されたものとして感受されているのである。

VI 現状から出ていくことの不安

他方で、「打開」や「新しいステージ」といった言葉から、むしろ多くの若者たちはチャレンジ精神に満ちており、より高いステージを積極的にめざしているとイメージする人もいるかもしれない。あるいは、このような事態が「若者が我慢を忘れ、こらえ性がなくなった」からもたらされたと考える人もいるかもしれない。だがおそらくそうではない。先取りして言えば、不安を喚起する現状を「打開」という志向は、必ずしも積極的なものとは限らないからである。

留意すべきなのは、既に述べたとおり、6割近くの若者は「不安・暗い」型、つまり将来に不安を感じ見通しが明るくないと考えているということである。同じ会社に長期にわたり勤続するというキャリアのあり方が相対化される中、一人ひとりのキャリアやライフコースは、就職や結婚をしたとしても、大きな変動のない安定した道を歩むことが保障されるわけではなくなっている。逆に言うと、現在の状況に違和感や行き詰まりを感じたとき、それでも今の仕事を続けて、現在乗っているレールからは降りずに、異動などのタイミングに状況が変わるのをただ待つという方法は、かつてほどには現実的な選択には見えなくなっている可能性が高いのである。

また、結婚であれ転職であれ、現在とは不連続な新たなステージに移行することで「打開」しようとするのは、それだけ現状が不安定で長期的な見通しをもちにくいから、という面も大きいとも考えられる。既に例をみたように、たとえ正社員であっても、現在の会社がリスクにさらされており、長期にわたって安定しているとは言いきれないという認識を語る例は、しばしば見受けられる。その意味で、この「現在と不連続なステージに移行すること」への志向もまた、積極的なチャレンジというよりは、先行きの不透明な現状にとどまることを回避しようという、リスク回避的で消極的な面をある程度もっているといえる。

特に、不安を有している若者たちにとってはそうだとはいえるのではないだろうか。

だからこそ、「打開」すること自体がはらんでいるリスクにも、決して無自覚ではない。そのため、若者たち自身の語りにおいては、「現状にとどまることの不安」だけでなく、「現状から出ていくことの不安」をみることもできる。

「現在の仕事はストレスも多く体に負担がかかる。今までずっとやりたいと思うことがあったが、現在の仕事は収入だけは安定しているので、なかなか踏み出せない」(32歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「今派遣で仕事をしていて正社員で転職したいが、今の経済情勢ではなかなか踏み出せない。事務職希望だが求人が少ない」(28歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「やりたいことはいくつかあるが、体調の不安もありリスクを考えると自信がなくどうにも踏み出せないでいる」(39歳女性、無職、「不安・暗い」型)。

「年金・高齢者医療費制度など、将来に対して不安要素が多すぎて現在も冒険ができない(例えば転職とか、再度大学へ入るなど)」(33歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

将来の不透明さゆえに「現状にとどまる不安」を抱く一方で、その現状を「打開」すること自体が別のリスクを伴っていることも確かである以上、「現状から出ていくことの不安」も抱かざるをえない。特に、30代の「若者」たちまで視野に入れるならば、既にその年齢までのキャリアの蓄積があることもあって、好むと好まざるとにかかわらず、これまでの蓄積をリセットすることになりかねない、リスクを伴う選択を簡単にはできない面もある。「現状から出ていくことの不安」も、決して無視することはできないのである⁸⁾。

将来への不安を感じつつ、今後の見通しも持ちにくいからこそ、「打開」のように現状が一変することを志向・期待する。そうしつつ、現状にあえてとどまるリスクと、別のステージに移行することを試みることのリスクを見極めながら、また現実の諸条件も考慮しながら、自らの将来を見つめている——それが多くの若者たちの現状なので

はないだろうか。

その結果、「現状にとどまることの不安」と「現状から出ていくことの不安」の両方を抱えつつ過ごす時間は、どうしても長くなっていく。簡単に、また何度も「打開」できるのであればいいが、そうではない中で、キャリアの具体的な決断をするのは、すぐにできることではなく、時間を要するようになっていくからである。将来への不安を抱えたまま過ごす期間が長くなるというのは、決して容易なことではない。ストレスフルな状態の長期化をどうやり過ごし、生き延び、有意義な時間にしていくかは、個人にとっても社会にとっても、きわめて大きな課題になりつつある（あるいは、既になっている）のではないだろうか。

将来への不安を感じつつ、今後の見通しも持ちにくいからこそ、「打開」のように現状が一変することを志向・期待する。そうしつつ、現状にあえてとどまるリスクと、別のステージに移行することを試みることのリスクを見極めながら、また現実の諸条件も考慮しながら、自らの将来を見つめている——それが多くの若者たちの現状なのではないだろうか。

Ⅶ 働くことからの離脱へ？

「現状にとどまることの不安」と「現状から出ていくことの不安」の両方を抱える中で、決して多くはないものの、留意すべき事例がみられるようになっている。それは、仕事や働くこと自体をやめてしまい、そのことによって不安を解消しようとしているのではないかと思われるケースである。つまり、働くことを通じて「打開」するのではなく、働くことからの離脱という形での「打開」である。そのひとつのパターンは結婚である。

「すぐにでも結婚したい。できれば経済的に安定している人を希望している。こちらが働かなければ食べていけない人との結婚は最初から考えていない」(36歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

「体裁が悪いので、早く結婚したい。好きな人よりも、お金を持っている人がいい。愛だけでご飯

は食べられないが、お金があれば生きてはいける。今よりも生活が厳しくなるのはいやだ。ダンナになる人の稼ぎが自分より少ないのはいやだ」(30歳女性、正社員、「不安・暗い」型)。

結婚に言及する記述は全体として非常に多いが、その中でこの両者は、いずれも決して全体を代表する語りとはいえず、少数事例とみなすべきかもしれない。あからさまに経済的な安定を求めている結婚の希望を語るこの回答だけを見ると眉をひそめる人もいるかもしれないが、結婚にこのような「打開」の可能性を求めるはっきりした言葉が語られるということは、この対象者の女性たちが仕事や将来に関して、自分の経済力だけではどうにもならないという感覚や不安を有していることの反映である可能性はないだろうか。ことさらに欲望が表明されているとき、その背景にあるのは、そこまでして求めねばならないほどの不安の中にいるとは考えられないだろうか。

さらに、より注目されるのは、宝くじの当選や株・FXなど手段はさまざまだが、一挙に高額の収入を得て、働くこと自体から離れたいと記すケースである。全部で26ケース(男性20ケース、女性6ケース)みられる。

「FXのスワップ金利をベースに不労所得を得、遅くとも5年後には働かずに生活できるようにする」(33歳男性、正社員、「不安・明るい」型)。

「宝くじを当てて仕事をやめる」(26歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。

「30代のうちに1億円貯金して、いつ会社を首になっても良いように備えたい」(32歳男性、正社員、「不安・明るい」型)。

「BIGで6億あてて日本を脱出する」(30歳女性、正社員、「不安・明るい」型)。

「宝くじの高額当選をして家を購入し、親の面倒を見なくてもいい環境でずっと趣味に浸っています。このままいくと激貧、親の面倒をみることになり、趣味に費やすお金はゼロ。生きている意味がなくなる」(27歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。

これも結婚の例と同様に、どこまで書かれたことをストレートに受け止めるべきかどうかは難しいところであるし、そもそも全体の中ではやはり

少数事例にすぎないものかもしれない。しかし、ここまで進めてきた議論をふまえると、これらのケースもやはり、高額な収入を求めることの背景に、不安がある可能性を想像することができるのではないだろうか。

これらの言葉も、一見すると強欲さや単なる金銭的関心のようにみえるが、むしろ「打開」への志向に由来するものだといえる。不安定な状況を脱して将来の不安を解消したい（さらに、その具体的な展望が考えにくいので、「生まれ変わり」的な状況の激変として語ってしまう）ということの表れだと思われる。

中には、「いずれは不労収入によって生活したい。収入に囚われず、好きな仕事をフリーでやっていきたい」（34歳女性、派遣・契約・パート、「不安・暗い」型）のように、不労収入を得つつ別の仕事をやろうと語る例もある。しかし大半は、そもそも仕事をすることや働くこと自体をやめてしまいたいような含意をもつものである。キャリアの形成期や確立期にある、25歳から39歳という若い世代の人たちの声に、働くこと自体を忌避するような言葉がみられること、そのような言葉を語らざるをえないような厳しい状況に彼ら/彼女らが置かれていることは、留意すべきことではないだろうか⁹⁾。

繰り返しになるが、あくまでも以上の例は少数のケースであって、どこまで重視すべきと考えるかは議論の余地がある。しかし若者たちと働くことの関わりについて考えるとき、「生まれ変わり」的な状況の激変が若者たちの口からことさらに語られ、しかもそれが働くこと自体からの離脱を志向するものであるという事実は、その背後に広がる不安の存在、そしてそのような不安をもたらしている若者たちの仕事の状況について、さらなる議論の必要性を示唆していると思われる。

VIII おわりに——不安の中の若者たち

本稿は、25歳から39歳の広い意味での「若者」たちへの調査結果、特に自由記述の回答をもとに、若者たちの将来への不安について、仕事や働くこととの関わりを重視しつつ考察を行ってき

た。以上で論じてきたのは、①「将来に対して不安を感じる事が多く」かつ「自分の将来の見通しは暗いと思う」若者が全体の過半数を占めるほど多く存在していること、②「現状にとどまることの不安」が若者たちの中にみられること、③そのことを背景の一つとして、現状を「打開」し、今とは異なる新しいステージに移ることを志向する言葉が若者たちの語りから多くみられること、④しかしそのような「打開」は同時に「現状を出ていくことの不安」を喚起するものでもあり、その結果として、二つの不安を同時に抱えた状態が長期間化しかねなくなっていること、⑤そのことの帰結（であるかもしれない事態）として、働くこと自体を忌避する志向が少数ながら若者たちの中にみられること、の5点である。

以上のことから浮かび上がってくるのは、若者たちの抱く不安というものが、発達上の一段階に由来するものや、時間の経過によって解消されるものでは、もはやなくなっているということである。古典的な移行モデルのゆらぎ（久木元 2009）の中で、むしろ不安は30代後半になっても続くこともある、持続的なものになりつつある。それは同時に、自らの将来やキャリアをめぐる、リスクを見極めたり、新しいチャレンジを試みたり見送ったりして過ごす期間が長くなるということの意味しており、それはすなわち、必ずしも満足できるわけではない状況のまま過ごさざるを得ない時間が、終わりが見えないオープンな状態で続くということでもある。かつて玄田（2001）は若者たちの不安を「曖昧な不安」と呼んだが、今日ではその曖昧な不安が長期化するという事態に至っているといえるかもしれない。

そう考えるならば、実際に一人ひとりの若者にとって課題となっているのは、いかに現状を「打開」して新しいステージに移行するかということではないのかもしれない。それよりも、長く続く、リスク含みの未決定な状況の中で、事態を「打開」したいのに簡単にはそうもいかないような毎日をどう生き延びるか、ということなのではないだろうか。別の言い方をすれば、好むと好まざるとにかかわらず完璧とはいえない現状が継続するという事態を生きることを、どのようにして

有意義な経験にしていこうかということこそが、現在の若者たちにとっての、より直接的で差し迫った課題なのではないだろうか。本稿の射程を超えるものであるが、広く若者たちへの社会的な支援策を構想するにあたって、若者たちにおけるこうした不安のあり方は考慮される必要があると考えられる。若者と不安の関わりは、さらに多面的な考察が求められているのではないだろうか。

Ⅳの冒頭で述べたとおり、本稿での考察は探索的なものであり、仮説的なロジックの析出を試みる議論にとどまっている。本稿で議論した諸点についてより厳密な検証を行うことは、引き続きの課題としたい。

*本稿は、2008～2009年度科学研究費補助金(若手研究B)「若者の自立志向の形成における社会的ネットワークの寄与に関する研究」による研究成果の一部である。また、久木元(2010a, 2010b)と重なる議論の一部を含んでいる。

- 1) 以下、いずれも『2009年調査』(後述)における自由記述。従業上の地位の整理については、後に挙げる表3の注1を参照。また意識の類型化については、表1を参照。
- 2) この調査の回答者は、すべて株式会社マクロミルのリサーチモニターである。調査の設計は筆者がすべて行い、調査の実施は同社に委託した。なおインターネット調査におけるサンプリングバイアスの問題については、本多(2006)および石田他(2009)を参照。それらにおいても指摘されているように、インターネット調査の回答者は高学歴層の割合が高くなる傾向があるが、この調査の場合も、最後に通った学校が4年制大学または大学院だった人の割合は、男性62.5%・女性40.5%であり低い値では決まてないといえる。以下の議論は、この傾向を前提として考える必要がある。
- 3) 日本人のみのデータから、筆者による算出で得られた数値。
- 4) 東京・神奈川・埼玉・千葉の各都県在住の男性に調査を行った谷(2009)は、20歳代・30歳代・40歳代のいずれにおいても、「自分の将来に不安を感じることもある」という質問にあてはまると回答した割合が70%以上であったことを報告している。ただしこれは男性のみの結果である。
- 5) 実際、この例示に反応したと思われる記述は若干みられる。例えば、「例文と一緒に、将来のことは気になるけど、今どうしたいらいいか、何をすればいいか……よくわからない。自分がどう進みたいのか自分でも全くわからない……」(32歳女性・派遣・契約・パート、「不安・暗い」型)。
- 6) ちなみに「異動」も3例のみで、これら以外に、明示的に現在の所属先の中での上昇を含意する例は、「ラインリーダーになる」という1例(男性、「非不安・明るい」型)しか見られなかった(ただし、正社員になるといった、身分の変更を伴うものは別だが、これはむしろ後述する「打開」の一

例だといえよう)。

- 7) なお、多くはないものの、将来について「(現状)維持」といった言葉で語る例もみられるが、その中には「将来に不安があるが、自力で打開できる状況ではなくしばらく現状維持するしかない」(39歳女性、正社員、「不安・暗い」型)のような言葉もあり、現状に満足した上で維持という言葉を使っているとは限らない。後述する「出ていくことの不安」ゆえの現状維持という言葉が少なくないと考えられる。
- 8) そうした中で、「結婚」や「正社員」のように、何らかの安定の確保にみえるものの価値はむしろ高まっている(ように映じている)。現状が不安定で長期的な見通しがもちにくくからこそ、たとえ実際には安定しているとはいき切らず、別のリスク含みのものであるかもしれないとしても、正社員も結婚も一層強く求められるようになってきている可能性がある。つまり、リスク含みの状況であるからこそ、現状とは不連続な新しいステージに移行することは、現状を「打開」する「生まれ変わり」の方法として一層価値を帯びて映じることになる。また逆に、少しでも安定しているもの(正社員という地位、結婚など)を確保していることも、価値のあるものとして見られるようになっていく。こうしたさまざまな要素の交錯の中に、若者たちは置かれているといえる。
- 9) これに類似した例として、4ケースという少数であるが、早期リタイアをしたいという記述もみられる(いずれも男性、2名は「不安・明るい」型、2名は「不安・暗い」型)。一例として、「定年まで、会社勤めをしたくない。できれば早い段階でアーリーリタイアメントをしたい」(27歳男性、正社員、「不安・暗い」型)。また不動産を取得して不動産収入を得たいというものも、同様の例といえよう。

参考文献

- 石田浩他(2009)「信頼できるインターネット調査法の確立に向けて」東京大学社会科学研究所SSJデータアーカイブ Research Paper Series, No.42.
- 久木元真吾(2009)「若者の大人への移行と「働く」ということ」小杉礼子編『若者の働きかた』ミネルヴァ書房、202-227.
- (2010a)「将来不安の中の若者たち」『季刊家計経済研究』88: 63-71.
- (2010b)「「やりたいこと」の現在」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 労働』日本図書センター、117-148.
- 玄田有史(2001)『仕事のなかの曖昧な不安』中央公論新社.
- 谷正名(2009)「20代男性・「不安」と「情報過多」の中で」『放送研究と調査』59(10): 2-33.
- 本多則惠(2006)「インターネット調査・モニター調査の特質」『日本労働研究雑誌』551: 32-41.
- 山田昌弘(1996)『結婚の社会学』丸善.
- (2004)『希望格差社会』筑摩書房.

くきもと・しんご 公益財団法人家計経済研究所次席研究員。最近の主な論文に「若者の大人への移行と「働く」ということ」(小杉礼子編『若者の働きかた』ミネルヴァ書房、2009)。社会学専攻。